

こころ

# ことのはじまり

“ことのはじまりはここから”  
— 新社屋着工前イベント —

2020.11.3 (火・祝) 10:00-16:00  
【山口市黄金町11-13】

**ID**

このプロジェクトは、I.D.Worksがアート・ディレクターに  
現代美術作家の鈴木啓二郎氏を迎え入れたコラボレーション企画です。





トキワ真館  
山口県 萩市 門司

- 5 ごあいさつ 文・田丸亮
- 9 零．ことわざ：定義
- 10 一．コンセプト
- 12 二．場所と風景
- 14 三．人物
- 16 四．離合集散、伝承、変貌
- 18 五．これからの“ことのはじまり”
- 18 六．もうひとつの「まち」
- 19 七．ことわざとこだわり 文・鈴木啓二郎
- 20 この土地について 文・福田悦子
- 22 プロジェクト解説 文・鈴木啓二郎



かつて、この地で樽づくりがされていたことを伝える写真

ごあいさつ

ことわざ “ことのはじまりはここから”

この度、社屋の移転・拡張にあたり現事務所そばの黄金町/鰐石町にある一角を新しい展開の地に選びました。

地主様から歴史的な背景や時間の流れ、その時々での生活、かつて営まれていた事業の事など様々な話を聞くことが出来ました。時代に合わせて変化してきたこの地を新しい社屋として、また地域のコミュニティーの場として、I.D.Worksらしい活動をしていきたいと考えています。

この度、イベント開催日を11月3日、文化の日に選びました。この地域の文化と一緒に楽しむ佳き日にしたいと思います。

株式会社I.D.Works 代表取締役 田丸亮







## 零. ことわざ：定義

「昔から世間に広く言い習わされてきたことばで、  
教訓や風刺などを含んだ短句」 - 出典：『日本国語大辞典』（小学館）

“ことわざの語源は、本居宣長が『古事記伝』のなかで、「こと」は「言」、「わざ」は「童謡・禍・俳優」などと同じ「わざ」であり、神や死霊が祟ることを「もののわざ」というし、人の口を借りて神の云わせたことばが「ことわざ」で、神の心であり、人の口を借りることで吉凶を人々に諭したものを云うのが、やがて、世間に広くいいならわされたことばそのものを云うようになったと云うのであります。” - 出典：駒澤大学総合教育研究部日本文化部門「情報言語学研究室」「言葉の泉」



シンボリックに健在する松の木

## 一. コンセプト

ことわざの定義にも見られるように、世代から世代へと受け継がれる教訓や知識を様々な視点で探究しました。そこから見えてくる価値観や風俗を改めて見つめ直し、この土地の捉え方や建築物のあり方、また、街の人々の生活スタイルなど、脈々と受け継がれる地域の生活や有機性を検証していくことがメイン・コンセプトになっています。

「ことわざ」という単語を使用した理由は、文字通りの定義だけではなく、言葉遊びとしてイメージの派生を促す目的もあります。例えば、「古と技」と漢字を当てれば、「古きものと技術」が想像できますし、「個と業」と漢字を当てれば、「そこに住む個人と生業」というようなイメージを想像することもできます。また、「古都和座」という漢字を当てれば、歴史的に西京と呼ばれ栄えていた西の都、山口の様子とそこで営まれていた地域の人々の生活や会話、交流などについても想像を掻き立てます。

I.D.Works「ことわざ“ことのはじまりはここから”」は、この鱈石町/黄金町という特定の地域で、自然と受け継がれてきた有形無形の事柄や価値を丹念に掘り下げ、その土地の生活者、通り過ぎていく通行人また旅人など、人や物の出入り、時間の流れ、営まれてきた生活を改めて見つめ直す機会であり、そこでの気づきを世代や立場の違いを超えて共有し、学び合い、ことわざのように次の世代へと伝えていくことを願って企画しました。

長年、生活者としてこの土地についての言い伝えを聞き、その移り変わりを体験し、変化に関わってきた方々の実体験と思い出を主軸としました。写真、映像、資料展示、また置き座と呼ばれるすずみ台の再現、出店などを通して、この地域の「ことわざ」を探求しました。



道路に面した会場入り口で迎え入れるのれん「ことわざ」(イメージ)

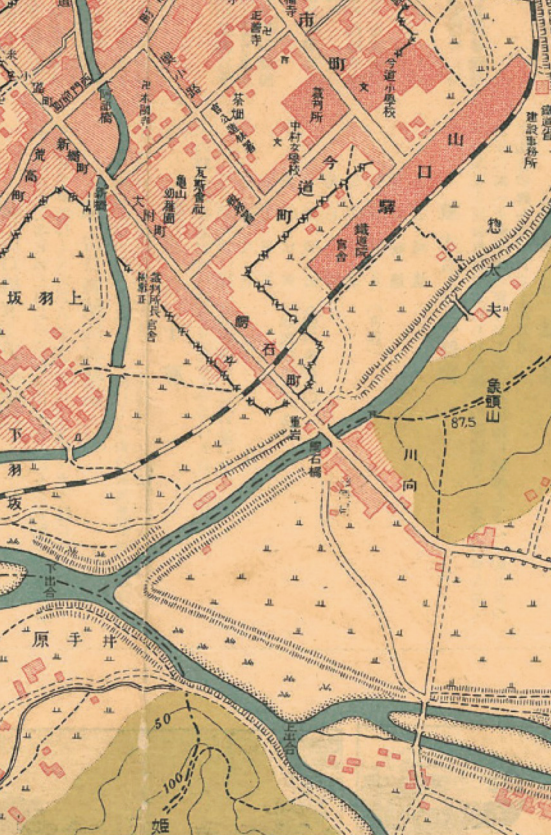
## 「ことわざ」の文字とのれんプロジェクトについて

今回の企画のタイトルにもなっている「ことわざ」という文字を日本の伝統的なのれんに施した作品。

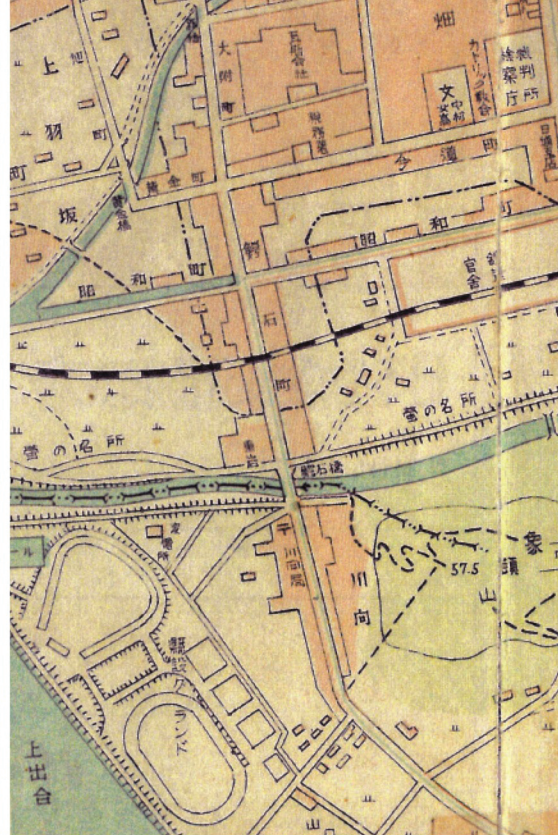
「ことわざ」のそれぞれの文字は、新社屋移転に関わる人々の個性的な筆跡を使用しています。「こ」の文字は、所有者であった松村和子さん、「と」はアート・ディレクションに携わった現代美術作家の鈴木啓二郎氏、「わ」は経営コンサルタントを担うloolの天下憲彰氏、「ざ」はI.D.Worksの田丸亮氏。

所有者であった松村さんの「こ」からはじまり、鈴木氏の「と」や天下氏の「わ」が橋渡しをし、新社屋としてこの土地を活用するI.D.Worksの田丸氏の「ざ」へと連なり、受け継がれていく。

4つに分かれたのれんの形状をうまく活用し、それぞれの個性を尊重しつつ、それら個が集まって生み出されていく新たな意味やこの場で広がっていく物語の入り口として、来場者を迎え入れます。



「最新山口市街図(大正14年/1925)」  
所蔵:山口市歴史民俗資料館



「観光山口市街案内図(昭和25年/1950)」  
所蔵:山口県立図書館

## 二. 場所と風景

### — 山口市鰐石橋、市街地への玄関口。

#### 鰐石町付近の賑わい(社交場、飲食店、銭湯など)

鰐石町の名称にもなっている鰐石は、大内時代に山口を訪れた明使の趙秩が読んだ山口十境詞にも登場する景勝地の一つです。かつてはホテルの観光名所としても知られ、防府市や大内地域から山口市の中心地へ訪れる際の玄関口として賑わう地域でした。時代の流れや街の発展に伴う都市計画と生活用式の変容により、その様子は時代に合わせて変化してきました。社会学や考古学など専門的な歴史資料を丹念に調べ上げる手法もありますが、そのような調査ではなく、その土地の生活者の見聞や手元にある資料、思い出を知ることで、彼らの視線や風景の断片を追体験していきたいと思ひます。



### 三. 人物

— この地域で生活し、地域の変貌を見たり、体験したり、関わってきた人々のご紹介です。

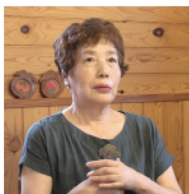


松村和子さん（醤油醸造、樽づくりなど）

I.D.Worksの新社屋となる場所に最後まで住まわれていた松村さん。防府市からこの地に嫁がれ、時代の流れとともに事業の変更や住人の入れ替わりなどを見てこられました。この土地は約120年前に建てられた建物を中心に、時代と共に増改築などが行われてきました。先代の醤油醸造の記憶から、大豆の入荷困難に伴う廃業と樽づくり事業への転換、手動式洗濯機のお話など、時代に翻弄されつつも、形を変えながら生活を営んできたお話が聞けました。この場には業者専門の卸パン屋さん、裁判所勤務の方、県庁に勤めていた方、大工さん、山口大学の学生など、多種多様な方々がお部屋を借りて生活や事業をされてきました。また、松村さんの夫である松村哲幸さんは観賞用の鯉や鶏の飼育をされていて、伺ったお話から、これまでの様々な活動が走馬灯のようにかけめぐり想像を掻き立てられました。

建物に関する逸話として、松村さんのご自宅に使われている躯体は、湯田温泉街の常盤旅館の建て替え時に出た木材を利用して造られたこと、二階部分に関しては当時の旅館と同じような空間構成が維持されていることを教えてくださいました。移築から改装へと時代や世代を超えて存続する空間や身体的な記憶の追体験を実感させられます。

松田洋子さん（質屋）



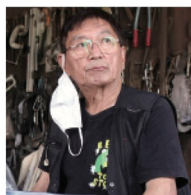
美祢市から山口市鰯石町へ嫁ぎ、嫁ぎ先の家業である質屋を若い頃から切り盛りしてきた松田さん。美術品から日用品などあらゆる品物の出入りを通して、地域で生活する人たちの苦労とやりくりを垣間見て来られました。その観察眼や先代が教え込んでくれた知識、そして、受け継いできた人々のつながりなどが、松田さんを通して現代にも受け継がれ、この地域の生活、コミュニティー、文化を形作ってきたのが伺えました。

坂井秀樹さん（広告代理店 アドライヴ）



現社屋の一部をお貸しくださっている坂井さん。鰯石町界限の記憶をあらかじめ書き起こしてくださっていました。図書館で手に入れた資料と照らし合わせても高い整合性が認められる記憶やお手元にお持ちだった先代の写真に映る地域の様子などから、現在とはかなり風変わりした街の様子が伝わってきました。旅館が少ない山口駅側の地域ではスポーツ大会などで多くの人が訪れ、地域住民の自宅が宿泊先になったとのことでした。先代は自転車関係の事業を営み、日本の経済や社会が少しずつ豊かになっていく渦中の道路整備や人の移動様式などの変貌の様子に関するお話も聞きました。

伊藤健二郎さん（鉄鋼業）



先代は鍛冶屋を営み、溶接などを行う鉄鋼業を営む伊藤さん。技術は見て覚える職人の世界のお話から、鰯石町界限の社交場や銭湯など、仕事終りのひと時についてお話していただきました。終戦後、近くのお医者さんから依頼された甲鉄のドア制作に関する秘話や山口市内の遊具点検、サッカーゴール組み立てのお話といった苦労話も聞かせていただきました。

津田ひろ子さん（たばこ屋さん）



山口市秋穂から嫁がれてきた津田さんは冷凍食品を取り扱う事業をご夫婦で続けてこられました。同時にたばこ屋さんとしても義祖母のお店を受け継ぎ、道を行き交う人々の姿を見てこられ、置き座のある風景の思い出もお話していただきました。冷凍食品の事業をいち早く取り入れ、様々な取引先へ配達をする日々とその事業を取り巻く時代の移り変わりなどのお話しをしてくれました。



大内地区と鱈石町を繋ぐ鱈石橋と重ね石

## 四. 離合集散、伝承、変貌

### — 人や物の出入りとそこに残っていくもの

大内方面から山口市中心市街地への通り道として位置する鱈石町の通りは、今では車の交通量も多く、通勤や通学をする人たちの生活道となっています。しかし、現在の通りの様子や建物の外観からはこの地域の方々の記憶を辿って浮かびあがる個人商店や社交場、銭湯など、その生活ぶりを察することはなかなかできません。今回のインタビューでお聞きした口承伝承や写真資料などから、この地域の人や物の出入りが活発に行われてきた様子が伺えました。

そのようなお話から建物の移築、結婚による嫁入り、食材や商品の仕入れや売買など、人や物が時代を通して絶えず変貌しながら、離合集散し、現在の街や生活を形作ってきたことを実感しました。目には見えない生活者の記憶と世代を超えて残る建物の存在の間で、私たちは生活を営んでいるという現状に気づかされます。常に何を残し、どのようにそれを活かすのか。その問いに対する視線や価値観とそれに伴う判断や行動が、私たちの現在を形作り、将来の生活へと繋がっていることが実感させられます。

家や建物を建てる過程には、様々な素材、道具、人材、技術、資金の関わりがあります。言い換えれば、建築物自体も離合集散を通してできた象徴的な社会現象であると思います。例えば、利用される木材一つを見ても、どこかの山で生育している木を職人さんが見定め、それを切り出す道具が存在し、材木屋さんが加工し、運ぶ運送屋さんがいる。そして、建物を立てる土地では、地鎮祭が執り行われ、大工さんや様々な業者の方が出入りし、それぞれの作業工程を担い、建物を完成させ、人が住まい、地域の住民として生活が営まれていく。鱈石町の通りやこの地の建物を見ていくと変貌を遂げながら、有機的な営みがされてきた様子が伝わってきます。



大内地区方面を望む風景



鴻ノ峰方面を望む風景



敷地内に残る橋や池の名残



## 五. これからの“ことのはじまり”

新社屋へと変貌するこの地はプライベートとパブリック、記憶と現実が混在し、様々な人や物の出入りが行われる場になると思われます。街や地域が有機的に離合集散するお話をしましたが、この地域自体が小さなコミュニティとして、象徴的かつ機能的な役割を担い、新たな「ことわざ」が始まります。

## 六. もうひとつの「まち」

### — I.D.Worksのオリジナリティーと新社屋の位置づけ

鰐石町界隈の変貌がそこに住む人たちの生活や事業によって大きな影響を受けてきたことが分かります。毎日、少しずつ離合集散を続けながら変化していく街の多様性や有機性の魅力を感じつつ、新社屋も多様な機能と役割が付与され、地域や街に少なからずとも影響を与えていくことでしょう。また、その新社屋の中でも多様な人たちが集い、交流するもうひとつの「まち」を形成することが期待されます。

この有機的な「まち」から新たな価値観や生活スタイル、文化などが発信され、地域や街と相互に関係しながら、この土地で脈々と受け継がれてきた生活がさらに次世代へと繋がっていくことを願っています。



現存する建築物の中で一番古いと推察される築120年ほどの建物

## 七. ことわざとこだわり

### — I.D.Worksの特徴：技術、スタイル、哲学、理念、配慮、ビジョンなど

I.D.Worksは、様々な技術や経験、背景をもった個の集合として、これまで様々なりノベーショント新築工事、事業展開をしてきました。その大きな特徴は、柔軟に対応する力やクライアントの希望と要望を超えていく発想や提案です。様々な人材が集まって試行錯誤することで、個人では到達できないアイデアと提案が可能になります。

あえてスタイルを絞らずに、丁寧に個々の案件を分析し、協議し、発案することで、独自の表現やスタイルが形作られていきます。

今回の新社屋プロジェクトは、自社自体がクライアントとなりますが、このプロジェクトを通して、近隣の方々や遠方から来られるお客様、また、通りすがりの旅行者など、少なからずいろいろな側面で影響を与えることを意識しつつ、独自の発想を発展させていきたいと願っています。

ここに今回の「ことわざ」を通して、古いもの、個々の人々、建物、仕事、時間、技術、交流、その場に残る独特の雰囲気など、様々な発見を実感し、多様で有機的なプロジェクトの進展とビジョンを持って新社屋プロジェクトを推進していきたいと思ひます。



## この土地について

### 時代を超えて受け継ぐこと

6年程前、この土地の所有者であった松村さんからリフォームのご相談を頂き、初めてこの土地に足を踏み入れました。その時にまるでタイムスリップしたかのような空気感に圧倒されたことを今でも鮮明に覚えています。

今回、この土地と鰐石町の通りを調査するなかで、この場所に多くの小売業・卸業などが変遷し、人々が集い、コミュニティが形成されていることを知りました。当時のお話を聞かせていただいた時に、その景色の記憶は決して華やかではなかったかもしれませんが、その時代を生きた方々のぬくもりを感じるものでした。物質的には便利になった現在に



昔の地図を広げながら、この地域のことを伝える松村さん

おいて、豊かさとは何かの問いが生まれました。

また当時は、生きることが今よりも厳しい時代の中でこの土地で事業をされていた方々は、地域がより良くなる為の視点をもっておられたのだと教えていただきました。

この土地との出会いがなければ、このようなことを知る機会はなかったでしょう。

昔の方々の暮らしや景色を知る体験は、生きること、働くこと、事業を営むことの本質に気づかせてくれるきっかけになり、その気づきが、新しい価値の源になると考えています。

株式会社I.D.Works 福田悦子



プロジェクト配置図

## プロジェクト解説

### い：のれんプロジェクト

Title：ことわざから見えるもの | のれん

制作者：松村和子、鈴木啓二郎、大下憲彰、田丸亮

今回の企画の中心的な言葉「ことわざ」をこの土地やこの企画に携わったシンボリックな人物が一字ずつ担当し、それぞれの個性の集合を表現する文字。時代とともに譲り渡し受け継ぐこと、個や技の集合、公私の境界線など、様々な意味や役割が重層的に付与された作品です。

### ろ：置き座プロジェクト

Title：追憶 | 置き座

制作者：I.D.Works設計デザイナー

(三輪ひとみ、竹橋勇人、岡田健太郎、小林美里、末永幸香)

地域の方の記憶を辿っていくと、置き座というすずみ台を道路に出して、ご近所さんとゆっくりした時間を過ごす習慣があったことが分かりました。この置き座は、特別なものではなく、日常生活の一部として夕涼みや干物づくりなどに自然と利用されてきたものでした。この土地には、その習慣を回想することのできる置き座が一つ現存しています。今回は、この置き座の解釈・再構築を、I.D.Worksのスタッフが担い、それぞれの解釈に基づいた表現をアイデアスケッチを通して発表するプロジェクトを設けました。また、新社屋でもこの置き座の設置をすることで、そこから派生する生活や文化を創造/想像する機会になることを期待しています。

### は：松の盆栽

Title：理想 | 盆栽

制作者：松村家

この土地に住まわれてきた松村さんのお庭を見ていくと、様々な植物が生育し、季節の移ろいを教えてくれる多様性が存在しています。その中には日本の伝統的な縁起物の松も所々で見つけることができます。入り口ののれんをくぐって、来場者を迎え入れるのは、縁起物の松の盆栽です。人為的に長い期間、自然の美しさを理想的な姿にとどめ、身近に置いて鑑賞したり尊んだりする姿勢や気持ちを改めて考えるきっかけにさせていただきたいと思います。

## に：写真の写真展

Title：新たな眼差し | 写真

制作者：高橋知紗

地域の方々にお話を伺ったときに、写真の存在の大きさを実感しました。過ぎ去ったひと時に写真を通して出会う新鮮さ。また、過去を写した写真を客観的に見ることで、その撮影者の追体験を想像することもできます。時間の経過や街並みの変化、また、被写体やその撮影者の存在など、様々なところに思いを巡らし、視点を置いてみることで新たな気づきを得られるのではないのでしょうか。

## ほ：風鈴

Title：風の便り... | 風鈴

制作者：田丸亮

最後の住人がどんな方だったか分かりませんが、この住人が生活していた時に設置した風鈴が見つかりました。庭を眺めながら、風流な音色を聞いて過ごした様子が目に浮かびます。風を受ける部分は敷地内に残っていた障子から紙を切り取り、詩的なメッセージを書き記しました。

## へ：I.D.Works ライブラリー

Title：意匠の温もり | アーカイブ資料、映像、模型、パネル

制作者：福田悦子、古屋睦恵、山本陽子、高橋知紗

I.D.Worksがこれまでに手掛けてきたリノベーション・新築工事、事業展開など、様々な資料を通して閲覧できるライブラリーです。I.D.Worksのこだわりやスタイル、多彩なスタッフによる柔軟な対応力や発想、独自の建築や街づくりを多角的に実践してきた事例をご覧ください。

## と：この土地の建築の歴史

Title：建物の移り変わり | 図表資料

制作者：I.D.S 技術室 福田耕平

この土地には明治時代から昭和50年代に建てられた様々な建物が共存しています。時代を経て、それらの建物が存続していくには、時代や生活スタイルに合わせた工法や材料の利用が不可欠でした。このような状況は、建築士やインスペクターにとっても大変興味深いものです。彼らの専門的な視線で、この土地の一つ一つの建物の採寸、登記資料、使われている工法と材料を検証し、建てられた時期や生活ぶりが推察できる図表資料を作成し展示しています。

## ち：リノベーション・プロジェクト・プラン

Title：時とともに... | 建築プラン

制作者：川端正人

この土地に現存する一番古いと思われる建物は、敷地中央に位置する比較的天井の低い二階建ての建物です。約120年前に建てられたと推察され、明治、大正、昭和、平成、令和と様々な時代を少しずつ姿を変えながら、生き抜いてきた様子が建物の所々に見受けられます。このプロジェクトでは、現時点でのイメージを提示し、新社屋の新たな姿を想像させます。

## り：古地図

Title：この土地の変貌 | 資料展示

土地を理解する上で地図の存在がとても大きな役割を果たします。今回のリサーチでは、大正14年に制作された古地図を始め、4つの地図を並置し、街の変化や当時の様子を想像できる資料展示にしています。

## ぬ：鉢の植え替え

Title：譲り渡し受け継ぐこと | 盆栽

制作者：I.D.Works、松樹園

少し大きめの松の盆栽が庭に置いてありました。残念ながら鉢は破損していましたが、松の盆栽自体は健在でした。鉢を植え替えれば、この松はより一層長く、健康に成長することができる。そう考えたとき、ここには譲り渡し受け継ぐ上での何か象徴的なことが見えた気がしました。長く続くものに注がれているものは何か。人が物を大切に作る気持ちと行動によって、ものは愛着とともに受け継がれていくのではないのでしょうか。

## る：フィルム上映

Title：ことのはじまりはここから | 映像

制作者：鈴木啓二郎

鰐石町界隈の撮影やそこに住む地域の方々にインタビューを行い、この土地の様子を伝える映像を制作しました。この土地のもつ独特な空気感。調査から約120年ほど前まで遡ることができますし、地域の人々の記憶からは多様な地域の側面が想起されます。また、様々な時代に建てられた建築物や改装の様子などから、住民の苦楽が垣間見えてきます。この土地に耳を傾ければ、敷地外の喧騒からかけ離れた静寂に気づかされ、この土地の時間がまるで止まっているかのようにも感じられます。これこそ、この土地の持つ独特な空気感なのかもしれません。

## を：レコードの部屋

Title：琴技 | レコード鑑賞

様々な時代に建てられた建築物が混在する土地で、あえて古いレコードで音楽を聴くと、何かに気付けるかもしれません。聴こえてくる歌詞や音色から、昔の粋な生活に思いを馳せ、この土地や時代をこれからのように生きていくのかを想像してみてください。



夕暮れ時に西から光が低く差し込んで出現した松の影

アート・ディレクション

KEIJIRO SUZUKI / 鈴木啓二朗

[www.keijirosuzuki.com](http://www.keijirosuzuki.com)

この度の企画タイトル「ことわざ “ことのはじまりはここから”」は偶然と直感に導かれたことを思い起こします。I.D.Worksという建築会社の方々との会話を通して「ことわざ」という言葉に辿り着きました。無意識のうちに慣れ親しんでいる「ことわざ」ですが、初めはその単語の定義である「昔から世間に言い習わされてきたことば」という理解しかありませんでした。しかし、この企画を進めていくうちにその語源「人の口を借りて神の云わせたことば」という意味を不思議と実感するに至りました。なぜそういった理解に至ったのかを考えてみると、世代を超えて存続する土地や建物自体に「ことわざ」と通ずる何かがあるのではないかと感じたからです。私自身がこの企画を進める中で、この土地や建物に対する視線が変化していったように、I.D.Worksの方々、地域の方々、来場者の方々にも、この土地や自分達の暮らしに対する視線の変化を感じてほしいと思っています。“ことのはじまりはここから”という一節は、この土地の住人であった松村さんのお話から出てきた言葉です。I.D.Worksや松村さんのご縁は、この土地から始まったのだと対話やインタビューを通して実感しました。一般的な歴史として公的な記録には残っていませんが、ここには特有の歴史や意味が世代を超えて脈々と受け継がれているのだと思います。この過程で得られた感覚を極力、共有したいと願い、様々なアイデアを提案し、I.D.Worksとのコラボレーションを通して多様で象徴的なプロジェクトの数々を実現するに至りました。

普段見慣れた地域や建物などの有形なものよりも、実は「ことわざ」の定義や語源に見られるような無形のものの方が長く残っていくのかもしれない。

“ことのはじまりはここから”です。

## ご協力くださった皆様へ

この度の「ことわざ“ことのはじまりはここから”」開催にあたり、多大なご協力を賜りました。ここに改めて深く感謝申し上げます。すべての方々のお名前を記すことはできませんが、こちらに謝意を表明いたします。

松村和子さん、松田洋子さん、坂井秀樹さん、伊藤健二郎さん、津田ひろ子さん  
また、ご家族、ご親族の皆様

主催 : 株式会社I.D.Works  
アート・ディレクション : KEIJIRO SUZUKI  
コンセプト・メーキング : 鈴木啓二郎  
編集 : 高橋知紗、福田悦子、鈴木啓二郎  
写真撮影 : 高橋知紗、鈴木啓二郎  
フォトクレジット : 鈴木啓二郎 (P. 2-3, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 19, 20-21, 25)、高橋知紗 (P. 5, 6-7, 8, 27)  
フィルム映像制作 : 鈴木啓二郎  
絵画 : ETSUKO FUKUDA  
出店者 : ゴトウバン、Saï Coffee Roastery、高橋洋品店、茶日月、発酵ゴト、lool  
パンフレットデザイン : 瀬尾デザイン事務所  
資料提供 : 山口市歴史民俗資料館、山口県立図書館  
運営スタッフ : 佐古隆宏、古屋睦恵、矢田紘司、山本陽子  
発行部数 : 300部  
発行日 : 2020/11/03

 in design  
**I.D.Works**

株式会社I.D.Works  
〒753-0044 山口県山口市鰯石町6-2  
Tel: 083-929-3960

[www.idworks.co.jp](http://www.idworks.co.jp)



**ID** in design  
**I.D.Works**